

次期学習指導要領では見直しが検討される中……

## 育成や評価の重要性が一層高まる 「主体的に学習に取り組む態度」

2025年7月4日に開催された、中央教育審議会（以下、中教審）の教育課程企画特別部会第10回で、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の観点の1つである「主体的に学習に取り組む態度」を、次期学習指導要領では個人内評価とするという改善案が文部科学省から示された。「主体的に学習に取り組む態度」の評価の改善の背景と具体的な内容、現行の学習指導要領の下で行われる教育活動への影響などについて、文部科学省初等中等教育局の田村学主任視学官に、VIEW next 編集部統括責任者の柏木崇が聞いた。



### 「学びに向かう力・人間性等」の構成要素を再整理

**柏木** 7月4日に開催された教育課程企画特別部会では、「豊かな学びに繋がる学習評価の在り方～過度な負担を生じさせない在り方との両立～」を議題として、学習評価の課題と具体的論点・方向性が整理され、「主体的に学習に取り組む態度」を個人内評価とするという改善案（P.2囲み）が示されました。文部科学省では、現行の学習指導要領の下での学習評価にどのような課題があると考えているのでしょうか。

**田村** 児童・生徒一人ひとりの「主体的に学習に取り組む態度」について、課題等の提出頻度や締め切りの順守といった定量的・形式的な「粘り強さ」ばかりを見取ってしまうなど、「主体的に学習に取り組む態度」が矮小化された評価になっているという事例が見られます。また、児童・生徒が授業や单元ごとに行う振り返りを評価材料として教師が「学習の自己調整」を見取ることが、教師の負担となっているという現状もあります。さらに「粘り強さ」「学習の自己調整」という2側面によって「主体的に学習に取り組む態度」が見える化できた一方で、それ以外の側面の児童・生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を見逃しているのではないかという課題感もありました。

**柏木** そうした現状・課題を踏まえ、児童・生徒の学習や教師の指導の改善につなげながら、教師に過度な負担が生じない評価の改善案として、「主体的に学習に取り組む態度」は教科・科目ごとでの目標単元評価から、教育課程全体を通じた「学びに向かう力・人間性等」の個人内評価に変更することが示されたのです。



文部科学省 初等中等教育局  
主任視学官

#### 田村 学

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

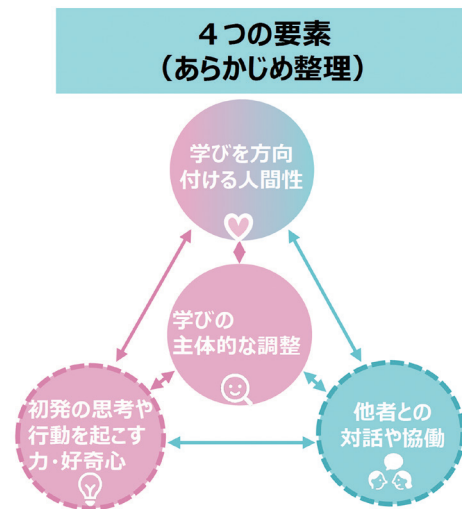
**田村** 「学びに向かう力・人間性等」は教科横断的に育成されていくものですから、教科を超えたより広い視野で、ある程度長い時間をかけてゆったりと見取っていくことで、児童・生徒一人ひとりのよさや可能性が見えやすくなり、現場の先生方も余裕を持って評価できるのではないのでしょうか。

また、教育課程企画特別部会では、「学びに向かう力・人間性等」を分かりやすく示すため、その構成要素を「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」「学びの主体的な調整」「他者との対話や協働」「学びを方向付ける人間性」などと再整理することについて議論してきました(図)。「学びに向かう力・人間性等」はいずれも各教科における思考・判断・表現の過程で発揮されるものであり、従来の「粘り強さ」「学習の自己調整」の2側面では評価しにくかった

こと、例えば、自分から何かに挑戦する、多様な他者と力を合わせる、多様な意見を受け止めるといったことも、児童・生徒の変容・成長として見取りやすくなると考えられます。

**柏木** 新たな観点別評価のイメージには、「学びに向かう力・人間性等」については、「目標を踏まえ、教科等を横断した個人内評価として指導要録に記載」とあります。教科横断的に見るということになると、各教科における「学びに向かう力・人間性等」の個人内評価をどのように集約し、誰が指導要録の総合所見欄に記載するのかを検討する必要があります。

図 「学びに向かう力・人間性等」の構成要素



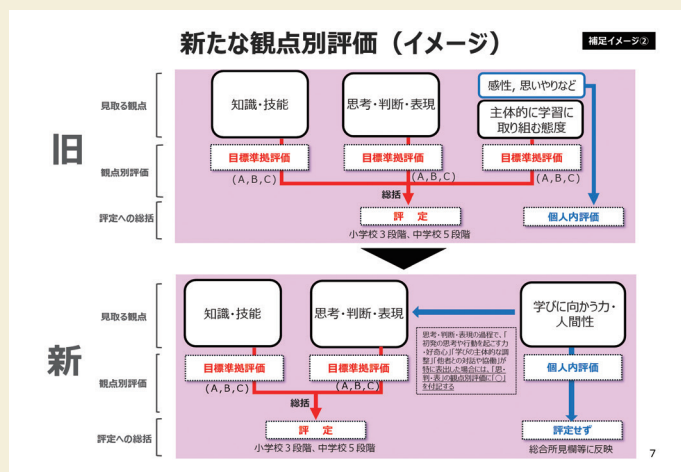
※中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点資料から抜粋して掲載。

## 「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関する改善案

「主体的に学習に取り組む態度」を含む観点別評価に関する改善案の柱は2つある。

1つは、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」については、学習指導要領に定める目標に照らしてその実現状況を評価する「目標準拠評価」から、教育課程全体を通じて個人のよい点や可能性、進捗の状況等に着目して評価する「個人内評価」へと変更するというものだ。現行の学習指導要領では、「学びに向かう力・人間性等」のうち、「感性・思いやり」といった目標準拠評価や評定に馴染まないものを除いた「主体的に学習に取り組む態度」を評価観点として設定し、「粘り強さ」と「学習の自己調整」の2つの側面から評価している。「主体的に学習に取り組む態度」が個人内評価になる場合、「感性・思いやり」などと「主体的に学習に取り組む態度」を分ける必要がなくなるため、評価観点を「主体的に学習に取り組む態度」から「学びに向かう力・人間性」へと変更することが併せて検討されている。

2つめは、「学びに向かう力・人間性等」を、教育課程全体を通じた個人内評価を基本としつつ、各教科における思考・判断・表現の過程で、学びの主体的な調整や他者との対話・協働などによって「学びに向かう力・人間性等」が特に表出した場合には、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記するというものだ。「学びに向かう力・人間性等」と「思考・判断・表現」は親和性が強く、思考・判断・表現の過程で「学びに向かう力・人間性等」の一部が見て取れることが考えられ、評定に反映することも検討されている。



※中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点資料から抜粋して掲載。

**田村** 小学校の場合は多くの教科を担当するクラス担任が中心となって児童の成長・変容を見取ることが可能ですが、中学校や高校ではどうすればよいか、今後の論点の1つになるかと思います。

## 観点別評価に取り組む中で、生徒を見取る力が養われた

**柏木** 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の仕組みを見直すとしても、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」は個人内評価として評価の対象であり続けること、そして個人内評価となることで、「学びに向かう力・人間性等」を育成することの重要性が低くなったわけではないことは、学校現場の先生方に認識しておいていただきたいことかと思います。とは言え、個人内評価となり、「学びに向かう力・人間性等」の育成や評価に対する意識が低下するのではないかという危惧もあります。

**田村** 「学びに向かう力・人間性等」の育成や評価の重要性が低くなったわけではないことは、文部科学省としても現場の先生方に伝えていかなければいけないと思っています。むしろ重要性は高まっています。

生成AIの進化が著しく、VUCA時代の現代では、「学びに向かう力・人間性等」が社会で一層求められていること、また、大学入試では総合型選抜・学校推薦型選抜が拡大し、「学びに向かう力・人間性等」も重要な評価対象となっていることは、いずれも周知の通りです。それらに加えて、現場の先生方の多くは、現行の学習指導要領の下での実践を通じて、「学びに向かう力・人間性等」を育成することの重要性を既に十分実感しているのではないのでしょうか。近年、意欲や意思、情動、社会性にかかわる非認知能力と、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等の認知能力は、互いに影響し、補完し合う形で発達することが分かってきています。児童・生徒のやる気や協調性、自制心など、ペーパーテストの結果には表れない長所を教師が認め、肯定的に評価することが、その児童・生徒の全人的な成長につながるという経験は、多くの先生が有しているものと思います。そのため、「学びに向かう力・人間性等」の育成や評価が軽視されるようなことはない、私は考えています。

**柏木** 確かに、現行の学習指導要領の下で、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を始めとする観点別評価に真摯に取り組むことで、生徒を見取る目を養い、それを基にした生徒への支援を豊かにした教師は少なくないと思います。観点別評価の取り組みは学習指導要領の次期改訂と評価の改善にも生かされていくのだと、私も現場の先生方に伝えていきます。

## 今後ますます求められる多様な評価方法

**柏木** 現行の学習指導要領において、「主体的に学習に取り組む態度」が観点別評価の対象となったことで、多くの授業でパフォーマンス評価やポートフォリオ評価などが導入され、評価方法が多様化しました。それが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を見直すことにより、ペーパーテスト偏重の評価へと戻ってしまう懸念はないでしょうか。

**田村** 「思考・判断・表現」の評価の過程で、「学びに向かう力・人間性等」を構成する要素が特に表出された場合に、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記することは、そういった懸念に対応するものでもあると思います。「思考・判断・表現」の評価の過程で「学びに向かう力・人間性等」を見取るためには、ペーパーテストだけでは不十分ですから、パフォーマンス評価などの重要性は今後も変わらないでしょう。

**柏木** 「学びに向かう力・人間性等」が特に表出し、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記された生徒は、例えば評定は「4」から「5」になるのか。その場合、客観性を担保するために、課題の提出状況や授業中の挙



手の回数などの記録のみを使った評価になってしまうのではないかとといった心配もあります。「学びに向かう力・人間性等」は総括的評価につなげるのではなく、あくまでも形成的評価として活用し、児童・生徒の学習改善や教師の指導改善の材料として活用するのがよいのではないかと考えます。

**田村** 「学びに向かう力・人間性等」が「思考・判断・表現」や「知識・技能」の評定に影響を及ぼす適否をどう考えるのか、また、「学びに向かう力・人間性等」を構成する要素を評価の視点とするのならば、具体的にどのように見取っていくのかなどについては、今後、整理・検討すべきことだと考えています。資質・能力の3つの柱は、それぞれ個別に育成するものではなく、一体的に育成するものであるという前提を大切にしながら、よりよい評価のあり方を考えていくべきだと思っています。

## 現行の学習指導要領下の実践が次につながる

**柏木** 現行の学習指導要領の下では、現場の先生方は学習指導要領の次期改訂に向けた議論をどのように捉え、学習評価の実践を積み重ねていけばよいとお考えですか。

**田村** これまで「主体的に学習に取り組む態度」の目標準拠評価に取り組んできた先生方は、その実践を通して、「主体的に学習に取り組む態度」が育まれた児童・生徒の姿を見取り、言語化する力を高めるとともに、「主体的に学習に取り組む態度」の育成・評価方法を磨き上げてきました。そうした経験は、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」が個人内評価になっても、大いに生きるものと思っています。すなわち、現行の学習指導要領の下での実践は、次期学習指導要領にもしっかりとつながっていくものであると考えていただきたいです。

**柏木** 「学びに向かう力・人間性等」を構成する要素が評価規準となる場合でも、「主体的に学習に取り組む態度」を「粘り強さ」「学習の自己調整」の2つの側面で評価した経験は生きるだろうと私も思います。

また、現行の学習指導要領の下で「学びに向かう力・人間性等」の育成や「主体的に学習に取り組む態度」の評価を進めていくことは、スクール・ポリシーの実現の面でも重要だと考えてます。各校が策定したスクール・ポリシーには非認知能力と言えるものが多く記述されています。スクール・ポリシーを絵に描いた餅にしないためにも、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」の育成・評価に力を入れるべきではないでしょうか。

**田村** おっしゃる通りです。文部科学省は、学習評価の改善案の検討とともに、例えば高校では、それぞれの実情に合わせて、必修修を含め、複数科目を統合したり、学校設定科目の修得単位数を増やしたりしやすくするなど、柔軟に教育課程を編成することを可能とする方向性の議論もしています。学校経営の観点からも重要な指摘であると思います。

**柏木** 各校の裁量が拡大していくからこそ、それぞれが育成を目指す「主体的に学習に取り組む態度」の評価とその結果を基にした授業改善、学習改善の重要性はむしろ高まっていくと言えそうですね。

**田村** その通りだと思います。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は今後も重視されますし、次期学習指導要領で「学びに向かう力・人間性等」が個人内評価となっても、その育成を実現するための議論が学校現場で活発に行われるものと私は考えています。

